

日本の伝統園芸を国内外へ発信。  
それは技術ではなく、日本の心を伝えるものだった。



フェア初日早々から多くのファンが集まった

盆栽、万年青（おもと）、春蘭、日本にはさまざまな種類の伝統園芸があり、世界から注目されている。こうした園芸文化を世界に発信するとともに、着実に次世代へとつないでいくために開催されているのが「伝統園芸フェア」である。特に今年度は国外への周知に力を入れるため、AJOSCがサポートを行った。

なかなか横につながっていかない園芸文化。  
7団体が協力して裾野の広がりを狙う。

幕末に日本を訪れた医師であり、植物学者でもあったドイツ人シーボルトが「日本の花栽培家はいくら賞賛しても足りないくらいだ。この国の庭園や植物は実に素晴らしい」と絶賛したことは有名で、帰国後も日本の草花や造園技術を世界に紹介した。この世界に誇る園芸文化を国内外へ発信していくのが「伝統園芸フェア」である。

7回目となる2008年は、桜前線がまさに東京にやってきた3月28日（金）～30日（日）に上野のグリーンクラブで開催された。関連する7団体が相互理解と技術発信を行う



数分で用土を作る職人の技がさえる

ものだが、プロアマ問わずに作品を出品しているところが面白い。

「例えばおもとのファンの方だと、普段はおもとにしか関心が無いんですね。でもこうしていろいろなものを展示すれば、他にも興味がわいてくるかもしれない。そういう横の広がりが狙いなんです」。主催の伝統園芸フェア実行委員会事務局の三瓶恵造さんはそのように語る。

屋外会場には、スズランやショウジョウバカマなど山野草を中心とした作品が展示されていた。近くでは、水苔で作った用土づくりの実演が行われ、大道芸人の芸に見入

るかのように人が集まっていた。

また屋内には、盆栽や東洋蘭、あるいは植物ではないが水石(すいせき)で表現された作品が展示されていた。盆栽には著名な演歌歌手や大相撲の親方の作品もある。さまざまな人が園芸を楽しんでいることがわかるし、なによりバラエティー豊かで見ていて飽きない。

### 伝統園芸に宿る日本の精神 だからこそ日本人に伝えたい。

会場で目についたのは外国の方が多いことだ。中国や韓国はもちろん、イタリア、ドイツなどヨーロッパからのお客さまもかなりいるようだ。

「意外かもしれませんが、盆栽などは海外のほうが隆盛といってもいいくらいですね。蘭は韓国の方に人気です。でも伝統文化ですから、日本の方にもっと来て欲しいというのが私たちの願いです。それで今回は広告費などをAJOSCさんに助成していただいたのです」(実行委員長内海二郎さん)

園芸好きの方は高齢者も多いため、インターネットだけでは告知しきれないという事情もあるようだ。今年のフェアに訪れたのは3日間で約4000人。会場規模からいうとなかなかの入りでPR効果は上々だということだった。

今回の成功をバネにして、今後はより多くの園芸業者さんにも参加してもらい、来客を増やしたいと同実行委員会では企画している。特に日本人をである。その理由は現代の日本人が抱える多くの問題に園芸が効力を発揮す



著名人の盆栽を含め、さまざまなジャンルの展示物を一度に見られるのがこのフェアの特徴



るからだ。

自然環境へのいたわりが芽生え、地球温暖化も肌で感じ取れる。土いじりや緑を眺めることでの癒しの効果もある。生き物を育成することの大切さを知ることができるなどである。

「ですから、日本の伝統園芸は技術ではなく、精神を伝えたものなんですね」とご自身が盆栽家である内海さんは説明してくれた。

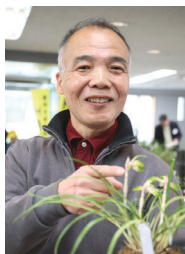
確かに丹精込めて作られた盆栽や、仏様のようなカタチをした山石、全体として一つの宇宙を表現しているかのような水石の展示物を見ていると、内海さんの話もうなずける。190年ほど前にシーボルトをとらえたのは、それではなかったか。伝統園芸は日本人の心を発信するものであり、子々孫々まで伝えていく必要のある文化なのである。

#### ●担当者より

これからは「植育」を推し進めていきます。



伝統園芸フェア  
 実行委員会 委員長  
**内海二郎さん**



伝統園芸フェア  
 実行委員会 事務局  
**三瓶恵造さん**

AJOSCさんの助成を受けて、例年以上のはがきを発送したり、広告を出すことができました。老若男女の区別なく親しむことができるのが園芸の良さです。今学校では「食育」といって食事や栄養の知識を教え始めていますが、私たちは「植育」を広げたいと考えています。これをお読みの皆さまも机の上にひとつ花を飾るだけでけっこうです。ぜひ、植物に触れてください。